



Title	デンマーク語の法助動詞 måtte の意味について : 【可能性】と【必然性】
Author(s)	大辺, 理恵
Citation	IDUN -北欧研究-. 2011, 19, p. 9-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95544
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語の法助動詞 *måtte* の意味について

—【可能性】と【必然性】—

大辺 理恵

1. 序論

現代デンマーク語の法助動詞 *måtte*¹ において、「～する必要がある」というように「必要」【必然性】を表す場合と、「～しても良い」というように「許可」【可能性】を表す場合とがあることは、よく知られている。² 一見奇妙ではあるが、「必要」【必然性】と「許可」【可能性】の相反する意味を、1つの法助動詞 *måtte* によって表すことが可能であるということである。³ *måtte* の「許可」の意味は、例えば以下の例文に見られる。

- (1) Du må godt låne min cykel. (Fischer-Hansen & Kledal: 146)⁴
 <私の自転車を借りても構いませんよ。>
- (2) Man må gerne gå på græsset i parken. (Fischer-Hansen & Kledal: 154)
 <公園内の芝生の上を歩いても構いません。>
- (3) Må jeg godt blive ude til klokken 11? (Davidsen-Nielsen: 188)
 <11時まで外出していてもいいですか?>
- (4) Du må ikke komme hjem senere end 9. (Davidsen-Nielsen: 189)⁵
 <9時以降に帰宅してはいけません。>

例文 (1)–(4) から分かるように、「許可」を表わす *måtte* は、肯定文、否定文そして疑問文など、文の種類を問わず使用されている。ただし、Hansen (1972: 20), Hansen & Heltoft (2007: 985) そして Fischer-Hansen & Kledal (2001: 154) に記述されているように、肯定文では副詞 *godt* や *gerne* とともに用いることが多いとされる。次に、*måtte* の「必要」の意味は、例えば以下の例文に見られる。

- (5) Kirsten måtte lave sit hjemmearbejde om, fordi der var for mange fejl. (Fischer-Hansen & Kledal: 154)
 <キアステンは、あまりにも多くの間違いがあったので、自分の宿題をやり直さなくてはならなかった。>
- (6) Jeg må gå nu, for jeg skal være hos tandlægen kl.13. (*ibid.*)
 <もう行かないといけません、というのも13時に歯医者に行くことになっていますので。>

「許可」を表わす *måtte* の場合とは異なり、「必要」を表わす *måtte* は、例文 (5) そして (6) に見られるように、その使用範囲が肯定文に限定されている。そして Hansen (1972: 20) や Davidsen-Nielsen (1990: 85-87) で指摘されているように、「必要」が否定文および疑問文で表わされる場合には、*måtte* ではなく、*behøve* という別の法助動詞が使われる。⁶

(7) Du **behøver** ikke bringe medicin. (Davidsen-Nielsen: 200)⁷

〈薬を持ってくる必要はありません。〉

(8) **Behøver** jeg at blive hjemme i aften? (Davidsen-Nielsen: 199)

〈今晚は家に居なくてはならないだろうか?〉

上記の関係を表にすると以下のようなになる。

〈表 1：現代デンマーク語における「許可」と「必要」を表わす法助動詞の使用範囲の違い〉

	肯定文	否定文	疑問文
「許可」	<i>måtte</i>	<i>måtte</i> (「禁止」)	<i>måtte</i>
「必要」	<i>måtte</i> ⁸	<i>behøve</i>	<i>behøve</i>

したがって現代デンマーク語においては、*måtte* が「許可」【可能性】と「必要」【必然性】の両方を表わすという現象は、肯定文に限った問題となっている。しかしながら、*måtte* という 1 つの法助動詞が対立する 2 つの意味を担うという現象は不思議である。本稿では、現代デンマーク語の *måtte* がこれらの対立する 2 つの意味を担っていることについての理由を、*måtte* の意味における歴史的推移に着目することで、明らかにすることを目的としたい。

以下では、まず現代デンマーク語における *måtte* の多義性を概観し、それらの意味が現代デンマーク語の法助動詞の意味体系にどのように組み込まれているかを記述する。さらに、*måtte* の意味における歴史的推移を探るために、中世デンマーク語における *mughu* (> *måtte*)⁹ の意味の記述を試みる。そして現代デンマーク語と中世デンマーク語の間における *måtte* の意味について、*Ordbog over det danske Sprog* (以下 ODS) による記述を参照し、最後に中世デンマーク語 *mughu* から現代デンマーク語 *måtte* に至る経緯をまとめる。

2. 現代デンマーク語における法助動詞 *måtte*

現代デンマーク語の *måtte* が表わす意味の記述は、辞書であれば *Den Danske Ordbog* (以下 DDO)、そして文法書であれば Brandt (1999)、Davidsen-Nielsen (1990) などにも詳しく述べられているが、本稿の目的は現代デンマーク語における *måtte* の意味を記述する方法を論じるのではなく、ここでは Hansen & Heltoft (2007)

による現代デンマーク語の *måtte* の意味に関する記述を、本稿における議論の立脚点として紹介するに留める。

2.1. 法助動詞 *måtte* の表わす意味

Hansen & Heltoft (2007: 984 ff.) は、法助動詞 *måtte* の意味を以下の4種類に区別している。¹⁰

① 認識的用法

- (9) jorden er helt våd, det må lige have regnet
 <地面がビシヨビシヨだ、雨が降ったところに違いない>

② (外的状況・要因から生じる) 必要

- (10) ustandselig hører man et vræl, og så må man jo ud og se, hvem af ungerne der nu er kommet til skade
 <ひっきりなしに泣き声が聞こえます、なので、一体子供たちの中で誰が怪我をしたのかを確かめるために外へ出なくてはなりませんよね>

③ 許可

- (11) du må gerne være med for min skyld
 <私に関する限り、あなたは一緒に来てもかまいませんよ>
- (12) Der må ikke ryges, drikkes eller spises under arbejdet.
 <仕事中は、喫煙や飲食はしてはいけません>

④ 願望

- (13) bare hun ikke må blive afskediget
 <彼女が解雇されないといいのだが>

以下では、法助動詞 *måtte* における上記の4つの意味が、どのように現代デンマーク語の法助動詞の意味体系に組み込まれているかについて着目する。¹¹

2.2. 法助動詞の意味体系における *måtte* の位置

Hansen & Heltoft (2007: 984 ff.) によれば、現代デンマーク語の法助動詞の基本的な意味体系は、*kunne*, *måtte*, そして *skulle* で形成され、以下の表2に示すように *måtte* は【可能性】と【必然性】の2つの意味領域で用いられている。¹²

〈表2：現代デンマーク語における法助動詞の基本的な意味体系〉¹³

	「モダリティの要因」 ≠ 「誰かあるいは何かの意図・意向」	「モダリティの要因」 = 「誰かあるいは何かの意図・意向」
可能性	KUNNE 「能力」・「可能性」	MÅTTE 「許可」 (= (11), (12))
必然性	MÅTTE 「必要」 (= (10))	SKULLE 「義務」

表2には、§2.1で確認した現代デンマーク語の måtte の意味のうち、②「必要」と③「許可」は組み込まれているが、①「認識的用法」と④「願望」の意味は含まれていない。この2つの意味を体系内に組み込むためには、表2で示されている法助動詞の意味体系を拡大する必要がある。

Hansen & Heltoft (2007: 990 ff.) は上記の意味体系に、さらに第3の対立項を加えて、その意味体系を拡充している。この第3の対立項とは、③：「主観的」vs. 「客観的」という対立である。彼らの説明によれば、「主観的」は、「モダリティの要因」が「話し手」に特定される場合を指すのに対して、「客観的」は「モダリティの要因」が「話し手」に特定されない場合を指す。¹⁴

しかしながら、この第3の対立項による意味の違いは、現代デンマーク語では法助動詞の違いによって表わすことはできない。したがって、第3の対立項における違いは、以下の例文にあるように、別の方法で、例えば法助動詞に続く受動態の違いによって示されると考えられる。¹⁵

- (14) han må opstilles til formandsposten (Hansen : 21)
 <彼は代表候補にかつぎあげられる必要がある>
- (15) han må blive opstillet til formandsposten (Hansen: 21)
 <彼は代表候補にかつぎあげられるに違いない>
- (16) Der må ikke ryges i bussen. (Fischer-Hansen & Kledal: 141)
 <バスの中では喫煙してはいけない。>
- (17) den lille sorte høne må ikke blive spist (Hansen & Heltoft: 991)
 <その小さくて黒い雌鶏が食べられませんように>

以下の表3では、例文(14) — (17)が拡大された法助動詞の意味体系のどこに位置するのかわを示す。

〈表3：現代デンマーク語における法助動詞と受動態によって表わされる意味体系〉

		「モダリティの要因」 ≠「誰かあるいは何かの 意図・意向」	「モダリティの要因」 =「誰かあるいは何かの 意図・意向」
可 能 性	「モダリティの要因」 =「話し手」	KUNNE + <i>blive-passiv</i> 「認識的用法」	MÅTTE + <i>blive-passiv</i> 「願望」 (= (17))
	「モダリティの要因」 ≠「話し手」	KUNNE + <i>s-passiv</i> 「能力」・「可能性」	MÅTTE + <i>s-passiv</i> 「許可・禁止」 (= (16))
必 然 性	「モダリティの要因」 =「話し手」	MÅTTE + <i>blive-passiv</i> 「認識的用法」 (= (15))	SKULLE + <i>blive-passiv</i> 「伝聞」・「約束」
	「モダリティの要因」 ≠「話し手」	MÅTTE + <i>s-passiv</i> 「必要」 (= (14))	SKULLE + <i>s-passiv</i> 「義務・予定・意図」

Hansen & Heltoft の記述にしたがえば、§ 2.1 で確認した現代デンマーク語の *måtte* の4つの意味のうち、①「認識的用法」と②「必要」は【必然性】に、そして③「許可」と④「願望」は【可能性】の意味領域に属していると考えられる。

現代デンマーク語の *måtte* における以上のような意味体系を踏まえて、以下では、中世デンマーク語の *mughu* がどのような意味を持っていたのかについて見ていくこととする。

3. 中世デンマーク語における法助動詞 *mughu*

以下では、中世デンマーク語において *mughu* がどのような意味を表すことができたのかについて探っていく。まず、1300年頃から1700年頃の中世デンマーク語および前期新デンマーク語について扱った Kalkar (1976) による辞書の記述を取り上げる。次に、中世デンマーク語で書かれた3つの法律書について扱った Bjerrum (1966, 1967) による文法書の記述を概観する。¹⁶ そして最後に中世デンマーク語で書かれた法律書以外の書物における *mughu* の意味を探る。

3.1. Kalkar による記述

Kalkar (1976) の *mughu* の項では、以下の3つの意味が紹介されている。¹⁷

①：能力

(18) at wj moghe gøme slækten (Kalkar: 134)¹⁸

〈そうすれば私たちは子孫を残すことができる〉

②：(調子・気分などが) ~である

(19) ieg vil nu hiem til min hustru gaa oc see, huor hun oc mine børn
maa (Kalkar: 135)¹⁹

〈私はこれから自分の妻のもとに帰って、彼女と自分の子供たちの調子がどのようなか確かめたい〉

③：現代デンマーク語の måtte, burde, skulle の用法にしたがう

最初に挙げられている意味、「能力」については、その意味が【可能性】の意味領域に属するのは明らかである。また *mughu* におけるこの「能力」という意味は、語源的に最も古い意味であると考えられる。Nielsen (1968: 263) や Mikkelsen (1975: 351f.) によれば、中世デンマーク語の *mughu* は古ノルド語 *mega* に遡ることができ、元々は「能力」や「力・権力」などを意味していた。

次に *mughu* が「(調子・気分などが) ~である」という意味を表わす場合については、以下の2つの理由から、本稿では考察の対象としないこととする。それは②の意味が、本稿で用いている【可能性】と【必然性】の対立項で表わされる意味体系に組み込まれないこと、そして *mughu* が原形不定詞を従えるという法助動詞の文法的特徴を欠いていることの2つである。

最後の説明では、「現代デンマーク語の måtte, burde, skulle の用法にしたがう」とあるのみで、引用されている例文のうち、どの例文が現代デンマーク語のどの法助動詞の意味にあたるのか、という記述は為されていない。

したがって Kalkar による記述は、中世デンマーク語 *mughu* の意味を調べる上で、決して十分なものとは言えず、Kalkar の記述のみから中世デンマーク語における *mughu* の詳細な意味を探ることは困難だと言わざるをえないであろう。

3.2. Bjerrum の記述における *mughu*

中世デンマーク語における法助動詞の意味体系に関する記述は、Bjerrum (1966, 1967) に見られる。大辺 (2008: 90f.) では、Bjerrum の主張する中世デンマーク語で書かれた法律書における、法助動詞の意味体系を以下のような表にまとめた。

〈表 4 : Bjerrum (1966) に基づいたスコーネ法における法助動詞の意味体系〉

Bjerrum (1966) に基づいたスコーネ法における法助動詞の意味体系	「モダリティの要因」 ≠「誰かあるいは何かの意図・意向」	「モダリティの要因」 =「誰かあるいは何かの意図・意向」
可能性	mughu	mughu
必然性	skulu	skulu

Bjerrum (1966, 1967) の主張を受け入れるならば、中世デンマーク語で書かれた法律書においては、mughu は【可能性】の意味領域に属するものであって、現代デンマーク語の måtte のように【必然性】の意味領域に属することはなかったということになる。

しかし Bjerrum による分析は、法律書というジャンルにおいては妥当なものであると考えられる。なぜなら法律書においては、「法的に何を義務づけられているのか」や「法的に何を禁止されているのか」について扱う文脈がほとんどであると考えられるからである。ただ、中世デンマーク語において法律書以外の書物において、mughu がどのような意味を表していたかについても調査する必要があるだろう。

3.3. 法律書以外の書物における mughu

以下では、法律書以外のジャンルの中世デンマーク語で書かれた文献における mughu の意味に着目する。以下に挙げる例文は、中世デンマーク語で書かれた3つの文献、*Lucidarius* (1300年代後半)、*Sjælens Trøst* (1425年頃) そして *Karl Magnus' Krønike* (1480) を出典とするものである。*Lucidarius* そして *Sjælens Trøst* はキリスト教の教義などの宗教的題材を扱った書物であり、*Karl Magnus' Krønike* は「カール大帝」を題材とした武勲詩的性格を持つ書物である。以下では、まず【可能性】の意味領域に属すると考えられる mughu の意味を例文を挙げながら概観し、さらに【必然性】の意味領域に属すると考えられる mughu の意味についても例文を挙げ言及する。また例文は、出典が *Lucidarius* のものは例文の前に (L)、そして出典が *Sjælens Trøst* の場合は (S)、出典が *Karl Magnus' Krønike* の場合は (K) というように示す。

3.3.1. 【可能性】

中世デンマーク語の *mughu* は、*Kalkar* も示しているように「(主語の) 能力」を表わすことがうかがわれる。

(20) (L) Discipulus mwæ mæn see siælæn Magister ængæn legæmælegh tingh ma hennæ halnæ ællær see vdæn gud vil nogær mænæskæ thet (Kroon *et al.*: 317)
〈弟子:魂を目にすることはできないのですか?先生:肉体を持つものは、神がある種の人々のためにそれを望まない限りは、魂に触れることもそれを目にすることもできません。〉

(21) (S) templum var fira slyndokt. oc migitt stort. Nw ma thw vndra hvro som the matto the storo stenana bryda. (Nielsen 1937: 55)
〈その神殿は四角形でそしてとても大きかった。彼らがどのようにしてこれらの大きな石を割ることができたのか、と今お前は疑問に思うかもしれない。〉

(22) (K) k. sog vredelege pa hannum oc sade hwo skulle tha ware høffuitz man for myt folk oc hær till frankerige geuelon swaret thet mo wdger danske giøræ (Lindegård: 290)
〈皇帝は怒りをあらわにして彼に言った、「それでは誰がフランスまで私の民と軍を率いる者になるというのか?」 Gevelon が答えて言った、「それは Udger Danske ができます。」〉

また *mughu* を使って、*Kalkar* の辞書には特記されていないが、「主語」以外の外的な要素が原因となって生じる「可能性」を表すことができたことを示す例文も複数確認された。²⁰

(23) (L) Och mangæ andræ vnderlich tingh ther eer oc eth i haweth thet hether syrena thet syungher saa wenælik oc saa skønligæ ath ænghen fedlæ maa liges ther weth (Kroon *et al.*: 229)
〈他にも多くの不思議なものごとが存在する。1つは海の中に存在する。それは Syrena である。それはとても美しくそして素晴らしく歌う、それはどんなバイオリンも肩を並べることができないほどである。〉

(24) (S) tha hørdhe han ena røst af hemelin oc saghdhe. andrea thin bøn hon ær hørdh. sigh honum at han skal swa thvinga sin legema som thw hafvir thvngat thin. tha ma han behalda oc hafva rent lifverne. (Nielsen 1937: 60)
〈そのとき彼には天からの声が聞こえた、そして [その声は] 言った、「Andreas よ、お前の願いは聞き入れられた。彼に伝えなさい、自分の肉体を厳しく律するようにと、お前がお前自身の肉体を厳しく律してきたように。そうすれば彼は純潔を保つことができる。」〉²¹

- (25) (K) roland ok oliwer brødhæ eth stort gabb pa mwren so ath man **motte** age ther in met vij wognæ til lige (Lindegård: 194)

〈Roland と Oliver は壁に穴をこじあけた、それは7台の乗り物が一度に入ることができるほどであった。〉

次に「許可」を表す *mughu* についても例文を挙げておく。

- (26) (L) Maa presten ey en steth weth altæreth syæ al messen. (Kroon *et al.*: 181)

〈神父は祭壇のそばの一箇所でミサ全部を唱えてはならないのですか?〉

- (27) (S) Iosep swarathe ær hon høvisk oc dondis tha ma hon væl til mek coma. (Nielsen 1937: 45)

〈Joseph は答えた、「もし彼女が礼儀正しく心の優しい人であるなら、私のところに来てもらって構わない。」〉

- (28) (K) han sende syne men tiill k. ok sade mo ieg myth ryge beholde tha will ieg lathæ megh dōpæ ok tage wyt cristen troo (Lindegård: 261.)

〈彼は自分の部下を皇帝のもとへ送りそして言った、「もし私が自分の王国を保持しても良いのなら、私は洗礼を受けキリスト教を受け入れよう。」〉
最後に、「願望」を表わす *mughu* についてであるが、*Lucidarius* には *mughu* が「願望」を表わしているような例文は見当たらなかったが、*Sjælens Trøst* と *Karl Magnus' Krønike* には *mughu* が「願望」を表わしていると解釈できる例文が少数例ではあるが存在した。

- (29) (S) Daniel swarathe, o konung evinnirliga maat thv lifva. (Nielsen 1937: 13)

〈Daniel は答えた、「王よ、あなたが永遠に生き続けますように!」〉

- (30) (K) Tha the kommæ modh eth bergh hørde the iiij hedninge talæ og bade sin gudh ath the motthæ møde roland oc oliuer (Lindegård: 250)

〈彼らが山に向かっていたとき、4人の異教徒たちが話しているのを聞いた、そして彼ら [= 4人の異教徒たち] は、Roland と Oliver に遇えますようにと自分たちの神に祈っていた。〉

3.3.2. 【必然性】

【必然性】の意味領域に属すると考えられる *mughu* の使用は、*Lucidarius* においては見られなかった。これは Bjerrum の分析と合致する。しかしながら、*Sjælens Trøst* と *Karl Magnus' Krønike* では、Bjerrum の分析とは異なり、その使用が見られた。それは主語が、ある外的状況・要素が原因となって、ある行為を余儀なくされる、つまりある行為をする必要にせまられる、といった文脈で用いられている。²²

- (31) (S) hon giordh cors for sek. tha *mätte* diæfolin ryma. (Nielsen 1937: 32)
 <彼女は自身の前で十字を切った。すると悪魔は逃げなくてはならなくなった。>
- (32) (K) om sydher kam hedninge till wæryæ ok wordhæ meget stærkere en roland
Thij *mottæ* han fly till wadhet igen (Lindegård: 198)
 <ようやく異教徒たちが守りに駆けつけ、Roland よりもはるかに優勢になった。だから彼は浅瀬まで逃げ戻らなくてはならなくなった。>

3.4. まとめ

§ 3.3.1 そして § 3.3.2 で確認したように、中世デンマーク語における *mughu* も、現代デンマーク語の *mätte* と同様に、【可能性】と【必然性】のどちらの意味領域でも使用されていることが分かった。

ただ、【可能性】の意味領域においては、「(主語の) 能力」や「(外的要因によって生じる) 可能性」など、第2章で触れた現代デンマーク語の *mätte* の意味には含まれていないものも存在した。また、【必然性】の意味領域においては、「(外的要因によって生じる) 必要」を表わす *mughu* の用例は確認できたが、現代デンマーク語の *mätte* に見られるような「認識的用法」を示す例文は確認されなかった。

ただここで、*Lucidarius*、*Sjælens Trøst* そして *Karl Magnus' Krønike* に見られる *mughu* の意味の分布について見てみたい。

<表 5 : *mughu* が表わす意味の分布>

	総数	可能性	必然性	その他 ²³
Lucidarius	67	67	0	0
Sjælens Trøst	122	112	7	3
Karl Magnus' Krønike	77	58	18	1

先に、中世デンマーク語の *mughu* は、【可能性】の意味領域でも【必然性】の意味領域でも用いられていると述べたが、表 5 から明らかなように、*mughu* の表わす意味の分布を調べると、その使用は圧倒的に【可能性】を表わす場合が多く、【必然性】を表わす場合は少数であるということが分かる。したがって中世デンマーク語の段階では、やはり Bjerrum (1966, 1967) も指摘するように、*mughu* は原則としては【可能性】の意味領域を表わす法助動詞として理解し、【必然性】の意味領域を表わすという機能も持ち始めたと考えるのが妥当かもしれない。

4. Ordbog over det danske Sprog による記述

§ 3.4 で確認したように、中世デンマーク語の *mughu* と現代デンマーク語の *måtte* には、それぞれが表わすことのできる意味の違いが見られた。以下では、その違いに着目し、ODS や Mikkelsen (1975: 351f.) の記述を参考にしながら、中世デンマーク語の *mughu* の意味がその後どのように変化し、現代デンマーク語の *måtte* へと至っているのかを探ってみたい。

4.1. 【可能性】

Mikkelsen (1975:351f.) では、*mughu* に見られた「(主語の) 能力」という意味は、「16世紀においては珍しいことではなかったが、現在では非常に稀である」と述べられている。²⁴ また ODS の *måtte* の項でも、#1 に挙げられている「状況によって決められた可能性、(天性による) 能力あるいは力、(法律によって決められた) 権力あるいは権利を表わす」という説明の中に「(主語の) 能力」を表わすと考えられる *måtte* を含む例文が取り上げられている。²⁵ しかしながら「現在は使われない」あるいは「古風な」あるいは「方言的な」用法である、という但し書きが付記されていることを考慮すれば、*måtte* の項が含まれる ODS の 13 巻が出版された 1932 年頃には、*måtte* が中世デンマーク語 *mughu* で表わすことが可能であった「(主語の) 能力」という意味を表わすことは稀であったと考えるのが妥当であろう。以下の例文は ODS からのもので、「(主語の) 能力」を表わすと考えられる *måtte* の例文の中で時代的に最も現代に近いものである。

(33) *vi rider Rytterne i Møde og sinker deres Komme, mens vi maa (ODS: 720)²⁶*

〈私たちは騎兵に向かって馬を走らせ、できる限りの間、彼らの到着を遅らせよう。〉

「(外的要因によって生じる) 可能性」については、ODS においては明確な説明がなされていない。しかしながら、#1 に挙げられている例文を観察すると、いくつか「(外的要因によって生じる) 可能性」を表わす例文が含まれている。

(34) *"Tøv dog lidt endnu .." – "Jeg maa ikke blive."* (ODS: 719)²⁷

〈「もう少し待たないか」 – 「私は留まることはできない」〉

(35) *"Hør du, Hr. Oluf, træd i Dansen med mig!" .. | "Jeg ikke tør, jeg ikke maa, | i Morgen skal mit Bryllup staa."* (ODS: 720)²⁸

〈「ねえ、オーロフ様、私と一緒に踊ってくださいな！」(…)「私は踊る勇氣もないし、[そんなこと] できません、明日は私の結婚式ですから」〉

例文 (34) も (35) も否定文で用いられているが、どちらも主語に「留まる能力」あるいは「踊る能力」がないことを表わしているのではなく、例文 (34) ではその理由は述べられていないが、例文 (35) では「明日結婚式があるという身なの

で、あなたとは踊るわけにはいかない」というように、何らかの外的要因が根拠になって、「留まることができない」そして「踊ることができない」というように、可能性の否定が生じていると考えるのが妥当であると思われる。

しかしながら「(外的要因によって生じる)可能性」を表わすと解釈できる例文を含む説明にも、「現在は使われない」あるいは「古風な」あるいは「方言的な」用法である、という但し書きが付記されているので、*måtte* においては「(外的要因によって生じる)可能性」という意味も徐々に使われなくなっており、「(主語の)能力」と同様に、*måtte* の項が含まれる ODS の 13 巻が出版された 1932 年頃には、その意味は稀であったと考えることができるであろう。

また #3.1 では、中世デンマーク語の *mughu* について調べたときには見られなかった意味が言及され、例文が複数取り上げられている。

(36) Jonathan skal ikke vide dette, det maatte bedrøve ham. (ODS: 720f.)

<Jonathan はそのことを知るべきではない、それは彼を悲しませるかもしれない。>

(37) Jeg tør ikke lade Dig selv købe; Du maatte blive bedraget. (ODS: 721)

<お前自身に買わせられない、お前は騙されるかもしれない。>

#3.1 では「(ある状況で)起こるかもしれない、起こるであろう何かについての仮定上の可能性あるいは推測：しばしば時制をずらして用いられる」²⁹ という説明がある。「時制をずらして」というのは、例文 (36) そして (37) にも見られるように、*måtte* が過去形で用いられることを指している。

この「仮定上の可能性あるいは推測」という意味を、【可能性】の意味領域における法助動詞の「認識的用法」と解釈することはできないだろうか。つまり、「モダリティの要因」が「話し手」とであると考えると、「話し手が、命題内容が真である／真になる、ということ否定はできない」＝「命題内容が真かもしれない」という意味を表わしているというようには、考えられないだろうか。例えば、例文 (36) では、「話し手」が「Jonathan にそのことを知らせれば彼が悲しむということが起きないとは言えない」＝「Jonathan が悲しむかもしれない」というように考えていることが *måtte* によって表わされており、また例文 (37) では、「話し手」が「聞き手に買いに行かせると、聞き手が騙されてしまうということが起きないとは言えない」＝「聞き手が騙されるかもしれない」というように解釈することも可能ではないだろうか。

ただ、ODS の説明には「認識的用法」という概念自体が用いられていないため、例文の内容から、*måtte* がおそらく「認識的用法」で用いられているであろうと推測することしかできない。

しかしながら、この「～かもしれない」という意味を表わす「認識的用法」は

Brandt (49f.), Hansen & Heltoft (2007: 961) や Davidsen-Nielsen (1990: 73ff.) によれば、現代デンマーク語では *måtte* ではなく、*kunne* が担っている。

(38) Det **kan** være koldt i Stockholm, når du ankommer, så du må hellere tage varmt tøj på. (Davidsen-Nielsen: 76)

〈あなたが到着する頃にはストックホルムは寒いかもしれないので、暖かい格好をしてきた方がいいですよ。〉

したがって、*måtte* のおそらくは【可能性】の意味領域における「認識的用法」と考えられる「～かもしれない」という意味は、現代デンマーク語、少なくとも ODS が記述するデンマーク語（1700 年頃から 1950 年頃のデンマーク語）以降には、用いられなくなっていったのではないかと考えられる。

また、ODS の同箇所では、この「～かもしれない」を表わす *måtte* の用例として、特に譲歩を表わす従位節の中で用いられる例が挙げられている。

(39) mine kære Børn (*bør aldrig*) blive i Penge Sager Forlovere for nogen, i hvo det og være **motte**. (ODS: 721)

〈私の愛する子供たちは、たとえそれが誰であっても、お金のために誰かの婚約者になることは決してあってはならない。〉

(40) hun (*dvs.: en skuespillerinde*) **maae** tale eller ikke tale, hendes Spil gaaer uafbrudt fram. (ODS: 721)

〈彼女が（＝ある女優）言葉を発しようと発しまいが、彼女の芝居は止まることなく進んでいく。〉

以下の例文は、デンマーク語のコーパス：Korpus DK からのものである。³⁰

(41) (...) blev han også bange for at ødelægge noget i mellem dem, så hvor svært det end **måtte** være, var det nok bedst, at de kun var venner (Korpus DK)

〈(…) 彼は彼らの間にある何かを壊してしまうことについても恐れた、だから、それがどんなに難しいことであったとしても、彼らが友人関係に留まることは最良 [の選択] だったであろう〉

(42) alle mennesker har en enorm personlig frihed til selv at skabe sig det gode liv gennem en god livspraksis, uafhængigt af den tidlige personlige historie, hvor trist den så end **må** være (Korpus DK)

〈人は皆、日々の善行を通して、自分自身で自らに良い人生を構築するために、莫大な個人的自由を有する、これまでの個人の経歴にかかわらず、そしてそれがどんなに悲惨なものであっても〉

例文 (41) そして (42) から分かるように、この譲歩を表わす従位節中の *måtte* は、1950 年以降のデンマーク語でも使用されている。しかしながら、Brandt (1999) でも Davidsen-Nielsen (1990) でも Hansen & Heltoft (2007) においてもこの *måtte* の

用法を取り上げていないことを考慮すると、現在では *måtte* の中心的な意味を表わす用法などは捉えられていないのではないかと考えられる。

4.2. 【必然性】

ODS の *måtte* の項では、#5 に「因果的な依存関係、(必然的な) 結果あるいは前提を表わす」として【必然性】の意味領域を表わす *måtte* が扱われている。その下位区分である#5.1 には、「(観察や) 帰結を通して (ある程度確かな) 推定あるいは事実として確証されうるものについて」³¹ という説明のもと、*måtte* が「認識的用法」で用いられている例文が挙げられている。

(43) I er jo ikke Jomfrue meere, saa maa I jo være Frøiken. (ODS: 724)³²

〈貴女はもう [中流階級の] 娘さんなどではありませんよね、だとしたら貴女は [上流階級の] ご令嬢のはずですよ。〉

(44) Her maa vist boe en Balbeer; jeg seer, der henger Fade ud. (ODS: 724f.)³³

〈ここにはきっと理髪師が住んでいるに違いない、というのも [看板に] 髭そり用のカップがかかっているのが見えるから。〉

例文 (43) そして (44) は、#5.1 に挙げられている例文のうち、その年代が最も古いものである。どちらも出典は Holberg の作品であり、出典作品が書かれた年代は 1700 年代前半である。したがって 1700 年代前半には、【必然性】の意味領域において、*måtte* を用いて「認識的用法」= 「～に違いない、～のはずだ」を表わすことができたと考えられる。

5. 結論

これまでに述べてきたことをまとめると、中世デンマーク語 *mughu* は、すでに【可能性】と【必然性】という 2 つの異なる意味領域において、複数の意味を表わすことができたと考えられる。しかしながら、その使用範囲は圧倒的に【可能性】の意味領域の方が多く、【必然性】の意味領域で用いられる *mughu* はまだ少数であったと思われる。

その後、【可能性】の意味領域においては、「(主語の) 能力」や「(外的要因によって生じる) 可能性」という意味で用いられる *måtte* の使用は徐々に姿を消し、現在デンマーク語に残る *måtte* の【可能性】の意味領域における意味は「許可」と「願望」を残すだけとなっている。

また、【必然性】の意味領域においては、中世デンマーク語 *mughu* は「(外的要因によって生じる) 必要」を表わすだけであったが、その後現代デンマーク語の *måtte* はさらに【必然性】の意味領域における「認識的用法」という意味を獲得していったと考えられる。

以上見てきたように、現代デンマーク語の *måtte* に存在する「許可」【可能性】と「必要」【必然性】の相反する2つの意味というのは、中世デンマーク語 *mughu* の頃から存在するものではあるが、時代を経て観察すると、元々は【可能性】の意味領域を主に担っていた *mughu* / *måtte* がその意味を徐々に【必然性】の意味領域に拡大させ、そして徐々に【可能性】の意味領域で表わすことができる個々の意味を減少させてきた結果であると考えられる。

(2011年2月)

注

1. 現代デンマーク語の法助動詞 *måtte* は、以下のような活用をする。

不定詞形	現在形	過去形	過去分詞形
<i>måtte</i>	<i>må</i>	<i>måtte</i>	<i>måttet</i>

本稿では、対象となる現代デンマーク語における法助動詞 *måtte* の代表形として、不定詞形を用いることとする。

2. 「必要」【必然性】及び「許可」【可能性】というように記述しているが、「必要」と「許可」は、法助動詞 *måtte* の使用における具体的な意味をあらわし、【必然性】および【可能性】は、法助動詞の意味体系を【必然性】と【可能性】という対立項で捉えた場合に、「必要」＝「～する必要がある」、「～しなければならない」という意味は【必然性】の意味範疇に属すと考えられ、「許可」＝「～してもよい」という意味は【可能性】の意味範疇に属すことを表わしている。詳しくは、本稿の §2 で述べる。
3. 同様の事態は、清水 (2000) で詳述されているように、姉妹語であるスウェーデン語の *få* にも観察される。
4. 例文中の太字・下線は筆者による。
5. 「許可」を表わす *måtte* が否定文で用いられる場合には、「許可」が否定され「禁止」を表わすと考えられる。つまり、例文 (4) では、否定されているのは「9時以降に帰宅してもよい」という「許可」であり、その結果として「9時以降に帰宅してはならない」という「禁止」を表わすことになる。したがってこの場合に否定されているのは *måtte* が表わすモダリティ (= 「許可」) であり、命題 (= 「9時以降に帰宅する」) ではない。
6. この *behøve* という動詞については、① 活用の仕方、そして② *at* 不定詞を従えることがあるという2点において、現代デンマーク語における法助動詞の特徴と異なっているが、現代デンマーク語文法においては、Brandt (1999: 24-25), Davidsen-Nielsen (1990:38) そして Hansen & Heltoft (2007: 993-994) にも示されているように法助動詞として扱われる傾向にあり、本稿でもここで「法助動詞 *behøve*」と記すことにする。
7. 「必要」を表わす *behøve* が否定文で用いられる場合には、否定されているのは

モダリティ (= 「必要」) であり、命題 (「薬を持ってくる」) ではない。したがって、「～する必要はない」という訳になる。

8. 表 3 は *måtte* に焦点を置いて作成されている。したがって、法助動詞 *behøve* が否定文そして疑問文でしか使うことができない、ということを表わしているのではない。法助動詞 *behøve* は、以下の例のように、肯定文でも用いることができる。
 - (A) Jeg synes, jeg behøver at give en forklaring. (DDO I: 323)
〈私は説明をする必要があるように思う。〉
 9. Nielsen (1968: 263) の *måtte* の項には、中世デンマーク語の形態として *mugha* と *mughu* が挙げられている。このうち、*mughu* は *Gammeldansk Grammatik* の見出し語としても用いられている。中世デンマーク語において *mughu* が不定詞形であったかどうか自体は、さらなる議論が必要なことであるが、本稿では「中世デンマーク語 *mughu*」というように、*mughu* を代表形とする。
 10. 以下に挙げる例文 (9)–(13) の出典も同箇所からである。
 11. 現代デンマーク語では、法助動詞 *måtte* は以下のような文でも用いられる。
 - (B) Du må altså love mig ikke at blive vred på ham. (Davidsen-Nielsen: 194)
〈彼に腹を立てないと、本当に私に約束してくれ!〉
 - (C) Nu må De holde op med hele tiden at snakke udenom. (*ibid.*)
〈そろそろ、話をはぐらかしてばかりいるのは、やめて頂きたい。〉例文 (B) も (C) も、話し手は聞き手に対してある種の「要求」を行なっており、そのために *måtte* が「要求」を表わしているように思われる。しかしながら Hansen & Heltoft (986 ff.) では、例文 (B) そして (C) に見られるような *måtte* における「要求」の意味は、該当する文が発話された際に生じる間接的言語行為 (*indirekte sproghandlinger*) によるものであると捉えられ、*måtte* の意味には含まれていない。したがって本稿では考察の対象とはしないこととする。
12. 現代デンマーク語における法助動詞の基本的な意味体系は、以下の 2 つの対立項によって形成されている。
 - ① 可能性 vs. 必然性
 - ② 「モダリティの要因」 ≠ 「誰かあるいは何かの意図・意向」 vs.
「モダリティの要因」 = 「誰かあるいは何かの意図・意向」なお、この現代デンマーク語における法助動詞の基本的な意味体系については、大辺 (2008: 86–90) を参照されたい。
13. 表内の番号は、§ 2.1 内の例文番号を指す。
14. Hansen & Heltoft (2007: 992) では以下のように説明されている。

Mod sætning 3 er modsætningen mellem neutral (ikke fastlagt) modalfaktor og 1. personal modalfaktor (dvs. den talende er modalfaktor).

〈第 3 の対立は、中立的な (固定されていない) 「モダリティの要因」と 1 人称で表わされる 「モダリティの要因」 (つまり話し手が 「モダリティの要因」 である場合) との間に見られる対立である。〉
15. この第 3 の対立項は、Hansen & Heltoft (2007: 993) や Heltoft (2005: 87–88) で指摘

されているように、例えば英語では、次のように法助動詞の違い（つまり語彙の違い）によって表わすことが可能である。

(D) he may win [han kan vinde] <彼は勝利するかもしれない.>

(E) he can win [han kan vinde] <彼は勝利することができる.>

例文 (D) のように may が使われる場合には、「モダリティの要因」が「話し手」である場合であり、例文 (E) のように can が使われる場合は、「モダリティの要因」は「主語」にあると考えられる。英語とは異なり、デンマーク語ではどちらの場合であっても kan を用いて表わすことしかできない点に着目されたい。

16. 3つの法律書とは、スコーネ法 (Skånske Lov: 1250 年頃)、シェラン法 (De sjællandske love: 1300 年頃) そしてユラン法 (Jyske Lov: 1300 年頃) を指す。
17. Kalkar (1976) では、見出し語として mu(g)e (mo(g)e) が使われている。
18. 例文出典は Den ældste danske Bibeloversættelse (1524).
19. 例文出典は En Ræffue Bog (1555).
20. 以下の例文 (23)–(25) では、「外的要素」、つまり「モダリティの要因」を下線で示す。
21. 日本語訳の [] 内は、筆者によって付加された訳である。
22. 例文 (31) そして (32) では、「外的要素」、つまり「モダリティの要因」を下線で示す。
23. 「その他」には、§ 3.1 で簡単に触れたが、mughu が本動詞として「(調子・気分が) ~である」という意味で使われている例と、mughu が【可能性】及び【必然性】のどちらの意味領域にも解釈できるような例が含まれる。
24. Mikkelsen (1975: 351) には、”Den gamle betydning var endnu i det 16. årh. ikke ualmindelig.” とある。また、Mikkelsen (1975) の初版は 1911 年に出版されているので、Mikkelsen の言う「現在」とは 20 世紀初頭のことを指すと考えられる。
25. #1=måtte の項の説明に付されている番号として理解されたい。なお、#1 には次のような説明がある。 ”som udtr. for forholdsbestemt mulighed, (naturbestemt) evne ell. kraft, (lovbestemt) magt ell. ret. (ODS: 719)”
26. 例文出典は、Adelbrand og Malfred (1900).
27. 例文出典は、Trolddom (1848).
28. 例文出典は、Danske Folkeviser (1899 – 1909).
29. #3.1 には次のような説明がある。 ”som udtr. for en hypotetisk mulighed ell. antagelse om noget, der (under visse omstændigheder) kan ell. (let) kunde (tænkes at) ske, muligvis vil ell. vilde indtræde; ofte m. forskydning af tiden”
30. Korpus DK には、1983 年 - 1992 年そして 1998 年 - 2002 年にかけてのデンマーク語のテキストが含まれている。
31. #5.1 には次のような説明がある。 ”om hvad man gennem (iagttagelse og) slutning kan fastslaa som en (nogenlunde sikker) antagelse ell. kendsgerning”
32. 例文出典は、Den Politiske Kandstøber (1722).
33. 例文出典は、Mester Gert Westphaler (1723).

Om *måtte* i det danske sprog

– mulighed og nødvendighed –

Rie Obe

Resumé

Det er velkendt at det danske modalverb *måtte* har to betydningsvarianter som står i modsætning til hinanden, nemlig *måtte* (tilladelse) og *måtte* (nødvendighed). I modalverbernes system i moderne dansk står de to betydninger i de to modsatte betydningsdomæner, dvs. mens *måtte* (TILLADELSE) står i ‘mulighed’, står *måtte* (NØDVENDIGHED) i ‘nødvendighed’¹.

Denne artikel er et forsøg på at beskrive *måttes* to stik modsatte betydninger med en diakron synsvinkel, især med henblik på *måttes* semantiske udvikling.

Bjerrum (1966, 1967) præsenterer modalverbernes system i ældre gammeldansk, især baseret på de tre lovttekster, Skånske Lov (ca. 1250), De sjællandske Love (ca. 1300) og Jyske Lov (ca. 1300). I hans system står *mughu* (> *måtte*) kun i ‘mulighed’. Når lovtteksternes kontekster er begrænset til næsten kun at handle om TILLADELSE og PLIGT, kan det være interessant at undersøge hvilke betydninger *mughu* kan have i gammeldanske tekster i andre genrer.

Jeg har valgt de tre gammeldanske tekster, *Lucidarius*, *Sjælens Trøst* og *Karl Magnus’ Krønike* (1480). I de to sidste tekster findes der eksempler hvor *mughu* kan fortolkes som KAUSAL NØDVENDIGHED, som stammer fra en ekstern faktor.

- (1) (S) hon giordh cors for sek. tha **matte** diæfolin ryma. (Nielsen 1937: 32)
- (2) (K) om sydher kam hedninge till wæryæ ok wordhæ meget stærkere en **roland** Thij **mottæ** han fly till wadhet igen (Lindegård: 198)

¹ ‘mulighed’ og ‘nødvendighed’ refererer til hvert abstrakt betydningsdomæne der skaber en modsætning som anvendes til at konstruere modalverbernes system, mens f.eks. TILLADELSE eller NØDVENDIGHED refererer til en konkret betydningsvariant som det pågældende modalverb kan have i en bestemt kontekst.

Imidlertid er forekomsten af *mughu* (nødvendighed) meget sjældnere end forekomsten af *mughu* (mulighed), som ses i fig.1 nedenunder,

	i alt	mulighed	nødvendighed	de øvrige ²
Lucidarius	67	67	0	0
Sjælens Trøst	122	112	7	3
Karl Magnus' Krønike	77	58	18	1

Fig.1: Fordelingen af *mughus* betydning mht. modsætningen mellem mulighed og nødvendighed

Således kan man konstatere, at anvendelsen af *mughu* i 'nødvendighed' i gammeldansk var marginal, og at *mughu* forekom mest i 'mulighed'. Derudover kan man påpege at *mughu* var begyndt at udvikle sit betydningspotentiale til 'nødvendighed'.

Med tiden har *mughu* (> *måtte*) udviklet sig til at det har mistet nogle af betydningsvarianterne i 'mulighed', såsom EVNE, KAUSAL MULIGHED, hvilket også påpeges af Mikkelsen (1975) og *Ordbog over det danske Sprog*.

Af ovennævnte beskrivelse vil jeg konkludere at *måttes* to stik modsatte betydninger i moderne dansk er et tegn på at modalverbet *måtte* (< *mughu*) historisk set har udviklet sit betydningspotentiale fra 'mulighed' til 'nødvendighed'. Det havde engang forskellige betydningsvarianter i 'mulighed', såsom EVNE, KAUSAL MULIGHED, TILLAEDELSE, og ØNSKE, hvoraf *måtte* i moderne dansk kun har beholdt TILLAEDELSE og ØNSKE. Samtidigt har *måtte* (< *mughu*) udvidet sit betydningsdomæne til 'nødvendighed', f.eks. KAUSAL NØDVENDIGHED og EPISTEMISK NØDVENDIGHED.

参 考 文 献

- Bjerrum, Anders. 1966. *Grammatik over Skånske Lov efter B74*. København: Gyldendal.
- . 1967. *Grammatik over De sjællandske Love efter AM 455 12° Med tillæg om Jyske Lov efter Flensborghåndskriftet*. København: Gyldendal.
- Brandt, Søren. 1999. *Modal Verbs in Danish*. København: C. A. Reitzel.
- Brøndum-Nielsen, Johannes. 1971. *Gammeldansk Grammatik*. bd.7. København:

² Her inkluderes de eksempler hvor *mughu* betyder "have det", og hvor *mughus* betydning er uafklaret.

- Akademisk Forlag.
- . 1973. *Gammeldansk Grammatik*. bd.8. København: Akademisk Forlag.
- Brøndum-Nielsen, Johannes *et al.* (red.). 1932. *Ordbog over det danske Sprog*. bd.13. København: Det danske Sprog- og Litteraturselskab.
- Dahlerup, Pil. 1998. *Dansk litteratur. Middelalder*. København: Gyldendal.
- Daidsen-Nielsen, Niels. 1990. *Tense and Mood in English: a Comparison with Danish*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Fischer-Hansen, Barbara & Ann Kledal. 2001 (1994). *Grammatikken – håndbog i dansk grammatik for udlændinge*. Herning: Special-pædagogisk forlag.
- Hansen, Erik. 1972. ”Modal interessens. Nu bør det (komme) frem”, *Danske Studier* vol. 67, 5-36. København: Akademisk Forlag.
- Hansen, Erik & Lars Heltoft. 2007. *Grammatik over det Danske Sprog*, bd.3. Roskilde: Roskilde Universitetscenter.
- Hjorth, Ebba & Kristensen, Kjeld (red.). 2003. *Den Danske Ordbog*. bd.1. København: Det danske Sprog- og Litteraturselskab.
- . 2005. *Den Danske Ordbog*. bd.4. København: Det danske Sprog- og Litteraturselskab.
- Kalkar, Otto. 1976. *Ordbog over det ældre danske sprog : (1300-1700)*. København: Akademisk Forlag.
- Korpus DK: <http://ordnet.dk/korpusdk>
- Kroon, Sigurd *et al.* (eds.). 1993. *A Danish Teacher's Manual of the Mid-Fifteenth Century*. Lund: Lund University Press.
- Lindegård Hjorth, Poul. 1960. *Karl Magnus' Krønike*. København: J.H. Schultz Forlag.
- Mikkelsen, Kr. 1975 (1911). *Dansk Ordføjningslære – med sproghistoriske Tillæg. Haandbog for Viderekomne og Lærere*. København: Hans Reitzels Forlag.
- Nielsen, Niels. 1937. *Sjælens Trøst. (Siæla Trøst)*. København: J.H. Schultz Forlag.
- Nielsen, Niels Åge. 1968 (1966). *Dansk Etymologisk Ordbog*. København: Gyldendal.
- 大辺理恵. 2006. 「デンマーク語における法助動詞と受動態の関係について」, *IDUN – 北歐研究 – 17 号*, 47-74. 大阪：大阪外国語大学 デンマーク語・スウェーデン語研究室.
- 清水育男. 2000. 「スウェーデン語の助動詞 få の成立について — 義務的用法を中心に —」, *IDUN 14 号*, 123-149. 大阪：大阪外国語大学 デンマーク語・スウェーデン語研究室.